

連載②7
内海善雄の
(ITU前事務総局長)
「やぶ睨み」論
「ネット社会」論

「考える葦」の進化と鈍化

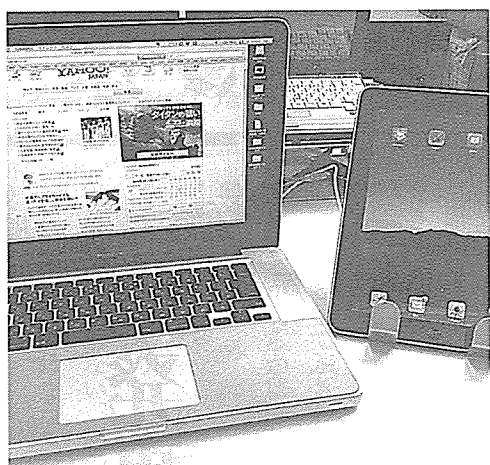
この三月に、これからの二十一世紀社会を象徴するようなニュースが二つあった。その一つは、『ブリタニカ百科事典』書籍版の出版打ち切りであり、もう一つは、スマートフォン（スマホ）の出荷台数が毎年ベースではPCを上回ったと米調査会社のIDCが発表したことである。

近代文明の象徴「百科事典」

「ブリタニカ」は、十八世紀後半のフランス啓蒙思想の代表的な成果の一つの「百科全書」(L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers)と共に、ほぼ同じ頃、英語世界のために編纂された百科事典である。知識や科学技術を、僧侶や貴族階級など特権階級のものから、庶民も手にすることができるようになった。

一方、フランスでは、ミニテルという名称のもと、フランスPTT（郵政省）の号令のもと、いわば強制的に普及させた。PTTは、電話帳の配布の代わりにミニテル端末を全家庭に配布したのである。ホテルの部屋にも端末が置かれていたことを覚えている人もいるだろう。フランス政府は、キャプテンを開発した日本にもこのミニテルの売り込みを図ったほどであった。

しかし、その後のPCの普及とインターネットの出現で、ミニテルも時代遅れのものになった。さらに、無数のネット利用者が勝手に勝手にアップロードした情報のカオスの中から、まるで神業のように目的の情報を見つけ出す検索エンジンの出現によって、関係者が寄り集まって組織的に情報体系を構築しな



進化の中にあるのが目に見える

した近代文明の象徴でもあった。

日本では「大英百科全書」と紹介されたが、十九世紀末には版權がアメリカに渡り、一九四一年から最近まではシカゴ大学が所有していた。ブリタニカは、人間が長い間かけて獲得した知識の宝庫ではある。しかし、所有者は平均して一年間に一度しか開いていないと、販売元自身が認めている。まさに宝の持ち腐れである。コストは二百もしないブリタニカを、二千近く払って購入する者は、自らの知的好奇心もさることながら、子供に最高の知識を身につけさせたいと思う親の切ない願いでもある。

ブリタニカ販売に致命的な障害になったのが、マイクロソフトが一九八〇年代に発売した、エンカルタ総合大百科(Encarta)と呼ばれるパソコン用のCD百科辞典であった。高価で場所をとるブリタニカはまたたく間に安価で場所もとらず、また手軽に検索ができるエンカルタのCDに置き換わった。

そのエンカルタも、今は無数のネット利用者の手で作成され、無料のウィキペディアに置き換わっている。一年に一度しか使われなかったブリタニカであるが、われわれが情報なければならなかったビデオテックスは立ち向かう術もなく、消え去ったのである。

そして今や、風景や自然現象、街角の情景など、一見無意味な情報までもが、まったく人間を介さずネット上に流れるようになった。

スマートフォンの光と影

さらに大きな変化が急速な勢いで進んでいる。今までは、これらの知識や情報を得るには事務所や書斎に鎮座するPCに頼らなければならなかった。ところが、個人が肌身につけるスマホの普及により、いつ、どこにいても、自分の手元で即座に情報入手できるようになった。まるで目と耳が世界中に伸びていったのと同じである。

それだけではない。前号でも触れたように、スマホはメールの発信はもとより、利用者の位置、行動状況、そして関心事や意見までも自動的に世界に発信しているのだ。

情報通信技術により人は、動物として与えられた五感の能力を物理的な時空の制限を超えて使うことができるようになり、まさに超能力を持った存在、神に近づくことになる。その結果、人間を人間たらしめている本質的なものが変わってくるかもしれない気がする。

「人間は考える葦である」というパスカルの言葉が思い起こされる。常に目の前に何があるのか分かる者にとっては、暗

を求めてネット検索をすると、一日に何度もウィキペディア上の項目がヒットされ、知らず知らずにお世話になっているのである。百科辞典は、ウィキペディアの出現によって初めて日常生活に役立つものになったといえる。

ミニテルの終焉

特権階級に独占されていた知識・情報がネットを通じて全人類に流布され、共有化されてきた状況は興味深いものがある。

三十年前、日本では、キャプテン・システムと呼ばれるビデオテックスの開発が行われた。家庭に普及したテレビを端末として利用した、電話線経由による情報提供サービスである。まさに現在のインターネットで享受できる基本的なサービス（ホームページ、メール等）と同じようなサービスを、テレビと電話線とを使って試みたのである。

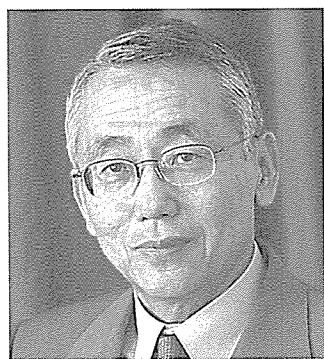
情報を提供する新聞社や旅行業者、広告代理店、メーカーなど、あらゆる業種の会社が集まって、キャプテン・システムにどのような情報を体系化して提供するか、何年間も議論した。だが、関係者の膨大な努力にもかかわらず、日本では広く普及することはなかった。

闇の中に目を凝らして見えないものを見る恐怖や驚きもないだろう。スマホのナビゲーターさえあれば、方向音痴ということもなくなるだろう。必要な事象を通知してくれるから「気がつかなかった」ということもなくなるだろう。

人は限られた情報を基に状況を想像し、そして考え、決断する。この「想像力」や「思考力」、「判断力」が高ければ優秀だと評価される。しかし、いつも必要な情報が手元にあると、この人間としての基本的な能力がさほど求められなくなる。求められるのは、スマホを活用して必要な情報入手する「情報収集力」である。

しかし、分らないことは何事も自分の分身となったスマホに尋ね、その指示通り行動するようになる。将来何をなすべきか、まだ見えぬ世界を夢見て心を躍らすようなこともなくなるのではなからうか。

スマホに首ったけの最近の若者の進化の方向が大変気になるものである。



内海善雄(うつみ よしお)
1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現な総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。早稲田大学客員教授。